

兵庫縣の養蜂植物 (前)

三 木 順 一

前号に筆者は「クログネモチと其の流蜜について」詳しくのべたが、今回我が兵庫縣全般について、何処のどんな植物が如何なる蜜を産するか概要をのべてみたい。同じ植物でも処によりよく流蜜したり、又反対にミツバチには全然価値のないものもあつたりする。ミツバチを飼つたことのない人は花さえ咲けば、キクでも、タンポポでも、サクラでも蜜がとれるものと思つているが、ミツバチの好む花は各地で大体きまつていて、美しい花が咲いても全然顧みられないものもある。以下春から順次月を追つてのべるが、その前にもう一度前号の筆者の発表を読んで頂けると好都合である。

2月

大体中国地方から關東地方までミツバチの女王が越冬を終え産卵を開始するのは平年ならば2月10日前後である。こうして育児の開始と共に働蜂は水と花粉とを集めに出る。この頃先ず最初に最も多く集められる花粉はオオイヌノフグリとハンノキとの花粉である。前者の汚白色の花粉塊が働蜂の後脚についているのを見て女王以下の健在を、巣を開くことなく知ることが出来る。スイセンも咲いているが、数少なくまた、訪れることは稀である。淡路島灘村のスイセンは有名であるが、採取されることも多くミツバチには価値はないものと思う。下旬になるともうウメが咲き始める。姫路市の白国、相生市、室津附近の梅林には多数の巣箱をみる事が出来る。毎年同じ養蜂家が来ている。気温低い頃とてミツバチの訪れることの出来る日も少なく、また時間も正午を中心に2〜3時間までである。ウメの蜜は芳香があるが味は苦いと言われる。この蜜と花粉とは春の育児に最も大切なものなので採蜜は出来ない。ウメの花は約1ヶ月利用される。同じ頃畑に多いハコベの類にもよく訪れているのを見る。

3月

ミツバチの活動はかなり盛んになる。上旬から中旬にかけて、ウメ、オオイヌノフグリ・ヤナギ類、クロツカス・サンシュユ・スギ(花粉)、下旬にはアセビ・キクマン・シキミ・ヤブツバキ・ヒサカキ・ヒアシンス・ニワトコ・キブシなど、種類も多くなる。ヤナギはカワヤナギが量も分布も多く、沢山の花粉を供給し養蜂家を喜ばす。この蜜は色黒く味は苦いといわれる。アセビの蜜は赤味を帯び味刺激性があり有毒と推定をされている。人やミツバチの中毒したという報告はない。

この蜜は神鍋山麓の和多田氏の採集されたという報告がある。フキは北海道・東北では有力な養蜂植物であるが、この辺では訪れているのを殆どみかけない。芳香の著しいジンチョウゲもミツバチの訪れているのを見たことはない。

4月

この月の中旬からもう蜜は巣に充満してくるので活動は目ざましい。中旬までヒサカキ・モモ・サクラ・ナタネ・ヤブツバキ・ソラマメ・アマナなど花の種類も量も多くなる。サクラは特に分布と量の多いヤマザクラとソメイヨシノとが重要である。これらは名勝の地即ち宝塚・須磨・明石・姫路城内・竜野・竹田町・篠山・鐘ヶ坂・三熊山などに多いことは筆者が詳しくのべるまでもあるまい。この蜜は赤味がかつた黄色であり、質は二級品に属する。養蜂家でサクラの蜜を採つたと言へば、それが2段以上の巣からのものであれば、相当な腕前で、米作でいへば当り4石以上の篤農家にあたるともいえる。サクラの名所の近くにその頃ミツバチの巣箱で2段以上のものを御覧になつたら感心して頂いていいと思う。ただしこのことは同じ地で飼つている人についてであつて、冬を暖国で越して来た場合についてではない。サクラの流蜜の頂点は(花粉の搬入も同じであるが)午前11時半頃である。この花は花期が短い欠点はあるが、所によつては落花後に葉にある花外蜜腺の蜜を集めているのを見る事が出来る。

ナタネは県下第2番目の養蜂植物であり、その蜜は淡黄色を呈し、味は1級の下、欠点として夏でも結晶しアイスクリーム様となるし、梅雨を越すと酸敗することがある。価格も第1級品レンゲの蜜よりも1斗あたり200円程度安い。結晶するためにミツバチの越冬用飼料として適当ではない。この蜜は中旬から採集することが出来るが、約2週間つづいてレンゲに引きつがれる。近年麦が自由販売になつてから、ナタネは全国的に栽培が多くなり養蜂家を喜ばせている。県下の多産の地方は加古郡・氷上郡・加東郡・朝来郡・有馬郡・佐用郡・神崎郡などである。

モモもサクラと同じ頃に咲く。これは他花授粉を必要とするので、媒介する昆虫特にミツバチを要することは識者の間でいわれているが、筆者の観察ではサクラやナタネが附近に多いと見捨てられてあまり顧みられない。花蜜の糖濃度の低いためと思われる。加之最近栽

培されているモモの優良品種は花粉が少ないので何とか考えなくてはならない。多産地は阪神近郊・西宮市・神崎郡中部などである。

ナシは香住地方に多く栽培されるが、モモと同様の理由でミツバチには役に立たない。ソラマメも多く栽培されるが、特有の色の花粉を供給するだけで蜜源としては大したものではない。モモやナシやソラマメの蜜を得たという報告は外国でもきかない。

ヤマモモの多い県南部、淡路島ではこれもいい蜜源でこの頃咲き、濃い黄色の蜜が得られるという報告がある。

同じ頃野にはスミレ・タンポポなど人に目立つ花はあつてもミツバチは訪れない。北海道ではタンポポによく訪れ、濃黄色の蜜がとれるという。中旬から下旬にかけて蜂場はナタネ・レンゲ・ソラマメの三色に殆どぬりつぶされ、極めて稀にオドリコソウ・カキドウシ・キイチゴ・ナツグミ・ダイコン・カエデ類などに訪れているのを見る。エンドウ・カラスノエンドウ・ウマノアシガタなどはスミレ同様普通ミツバチの訪れる花ではない。ツツジ類なども山肌一面に咲いていてもミツバチの訪花は珍らしく、年によつて所によつてこの蜜が巢に入ったという報告があるが、我が国でこの蜜を得たという報告はない。

5月

この月の中旬、レンゲの咲き終るまで蜂飼いの最も忙しい収穫期である。我が兵庫県の定置の養蜂家の一年の労苦の酬いられる2週間である。蜂場はレンゲ1色になり、もはや他のどんな花にも訪れるミツバチを見ることは殆どない。ミツバチの行動半径は約2キロであるが、この範囲内にレンゲ畑5反あれば1斗の蜜が得られるというのが養蜂家の常識である。蜜源に恵まれた老練家はナタネ1斗近くレンゲ2斗近く採蜜する。越冬用飼料は残してもレンゲ1斗というのは平年作でなくてはならない。この流蜜は気温摂氏20度を越すとずつと多くなりまたその1日中の流蜜の頂点は午後1時頃から3時頃の間にある。強群で条件がよければ1日2升近く巢に入る日がある。その1升5合以上がこの午後の2時間程の間に入るように思える。こんな都合のよい日はレンゲ畑がまだ桃色に見える日ではなく、終期近く少し紫色に見える日、それも前夜から晴天で朝の気温が低く、風は快晴で気温20度以上、戸外に出ていると少し汗ばむような日なのである。少し気温が低いと流蜜は減少する。養蜂家にとって常に惜しいことは、この紫色になるまでに多く刈り取られることである。レンゲの蜜は我が国産では味も色も第1級に属し、市場に出ている量も第1位である。

県下のレンゲの主産地は赤穂郡・佐用郡・宍粟郡・

加古郡・印南郡・神崎郡・氷上郡・朝来郡・城崎郡などである。

この頃ミツバチの訪れるものにはネギ・フジ・アキグミ・ツツジなどがあるが訪れは稀である。

レンゲが終ると活動はずつと衰えるが、次にミカンとトチノキに恵まれる人は更にこの蜜を得ることが出来る。ミカンは赤穂郡・津名郡(志筑)等では多く栽培されるが一般に地元の排斥、それもミツバチがカイガラムシを媒介するとか、果皮に傷をつけるとか、果実に種子が出来るとかという誤つた考えから入地難である。アメリカでは若い養蜂家は果樹園や牧場の花粉媒介のために手数料を得、蜜よりもこの方が利益が多く、これを正業とする者が多くなりつつあるというのに、我が国ではここだけでなくあちこちで果樹園や農村の排斥を受けている野蛮さである。ミカンの蜜は淡黄色、ミカンの芳香があり1級品に属する。年切れの傾向が強いが、家畜試験場の報告によれば1反歩のミカンから約20キロの蜜が得られるという。

トチノキの主産地は東北地方・関東・中部山岳地方で、我が兵庫県では城崎郡・美方郡・養父郡・宍粟郡奥地などに自生するが、何れも車輛を通じない溪谷中として移動には人肩によらなければならない上、雨の多い頃とてなかなかの労苦である。それでも前にのべたようにこの木の流蜜は我が国樹木中量も質も第1位とて移動養蜂家は必ず入地する。開花期間は約10日間、トチの流蜜は夕立の如しというのは養蜂家の合言葉である。流蜜の最大は群当りこの10日間に2斗位という。多少年切れの傾向有り、流蜜期間が短いので雨が多いと悲惨なことになる。近年養蜂家の大きな嘆きは木碗製造のためにこの木が伐採されることである。ソ聯に於ては第1の蜜源樹シナノキ(リーバと呼んでいる)はシベリア抑留者の話ではこの木を無断で伐採すれば何ヶ月かの重労働だということだし、最近の文芸春秋によればモスコウ市の街路樹は全部この木に更新されたという。トチノキを播種して流蜜するようになるには30年かかるという。どうか大切に保護されたい木である。

中、下旬ミツバチの訪れるものにはこの外にクローバー・アカメモチ・キリ・ネギ・カキ・エゴノキ・ニセアカシア・ハコネウツギ・タラヨウ・ミヤコグサ・マツヨイグサ・ヤグルマギク・ミズキなどがある。

ニセアカシアは東北・北海道の主要蜜源であるが、関西では数も少ないし、また訪れ方も少なく重要でない。然し最近砂防のため、また肥料木として沢山植樹されつつあるので30年程すればものになると考えている。

ネギも採種地など多く栽培される所では、レンゲの

(p. 254)

塊茎を採集し蒸して乾したものを延胡索といい、球形または多角形の塊状で薬用に供する。断面は黄色で苦味があり無臭である。大部分は柔細胞より成り糊化した澱粉を充たす。中央に少数の放射状に排列した維管束がある。内地産は従来福岡、熊本など九州産を主としたが、だんだん産額を減少し朝鮮や支那から輸入する現状であるという。

成分はプロトピン、ブルボカブニンを主とし、テトラヒドロパルマチンなどを含む。鎮痛、鎮経の効があり腹痛、頭痛などに煎用し、月経痛、子宮病等婦人病に賞用される。注射薬エンフシンは神経痛、腰痛に用いる。

ケシ科

A₁雄蕊多数距なし

B₁胎座4—8

C₁柱頭は花柱分枝間……アザミゲシ属

C₂柱頭盤状体上にあり……ケシ属

D₁多年草粗毛あり……オニゲシ

D₂2年草有毛葉全裂……ヒナゲシ

D₃無毛葉裂基茎をだく……ケシ

B₂胎座2果実扁平—線形

C₁花弁4

D₁2年草花小11mm……クサノオウ

D₂多年草花大2cm……ヤマブキノウ

C₂花弁0……タケニクサ属

A₂雄蕊4—6個心皮2個

B₁雄蕊4葉はくしの齒状……オサバグサ属

B₂雄蕊6

C₁外側2弁基部に胞あり……コマクサ属

D₁花は大形多花……ケマンソウ

D₂花は小形少花……コマクサ

C₂外側上方弁に距あり……キケマン属

D₁塊茎あり花は紫紅色まれに白色

E₁塊茎は球形通常1個の茎を生ず

F₁果実線形塊茎内やや黄……エゾエンゴサク

F₂果実ひ針狭卵塊茎内は白

G₁花長15—25mm……ヤブエンゴサク

G₂花長11—13mm……ミチノクエンゴサク

E₂塊茎は球~円錐形花茎数個

繊細小形……シロボウエンゴサク

D₂塊茎なし花は黄色まれに紫紅色

E₁距は花弁と同長茎よく伸長……ツルケマン

E₂距は短い茎は直立

F₁花は紫色……(ヤブケマン) ムラサキケマン

F₂花は黄色

G₁果実屈曲花色黄緑……ヤマキケマン

G₂果実曲らず花色黄又は淡黄

H₁花6—7mm苞線形……ホザキケマン

H₂花12—22mm苞は針形×

×花時の根葉莖葉は羽生する

I₁実はくびれず……シマキケマン

I₂実くびれる多少彎曲する

J₁種子に細点あり……エゾキケマン

J₂種子に突起あり……ミヤマキケマン

H₃葉は3出、茎は肥大する……キケマン

ケシ科の植物はほとんど総てが、多かれ少なかれアルカロイドを含んでいて、薬用にもなるが分量を過したり、誤つて食べたりすると中毒をひき起す。一般にアルカロイドはタンニンに会すると、水に溶けない沈澱物となる性質があるから、万一中毒した場合濃い番茶を飲むと、胃腸からの吸収を防ぐことができる。素人手当の第一はまず胃の内容物をすみやかに吐かせることである。口中に指をさしこみものを摩擦し、その刺激で毒物を吐かせ、多量の微温湯を飲ませ、その上に番茶を濃く煎じて与える。他方吸着力の強い薬用の炭末を多量に与えることも有効である。

アルカロイドの中毒に下剤の使用は余り効果がなく、ヒマシ油を与えるとかえつて毒の吸収を促し、病勢の悪化に拍車をかける虞があるというから、一応禁忌的のものとして心掛けておくべきことであろう。

(p. 224 から)

終り頃かなり蜜が入り、蜜はネギ臭を帯びるが、放置すれば自然に無臭となる。

同じ頃、シイもよく流蜜する。ミツバチがこれにかかるると巢内は精液臭がする。この蜜は九州に多く産し上質である。兵庫県では蜜を得た所はきかない。

エゴノキもこの頃咲く。この蜜は淡黄色透明という報告がある。

カキも下旬に5—7日間咲く、よくミツバチの訪れる花で、多く栽培される地方では黄金色の透明な甘味の強い蜜が得られるが量は多くない。年切れの傾向は

著しい。蜜分泌は野生柿に多い。この花は下向きに開くため、降雨中でもミツバチは活動する。ミツバチは花蜜が雨に流されなければ、このように雨の中でも活動する。この点レンゲやナタネやトチは雨の日は駄目である。

西播に有名なコヤスノキもこの頃咲き終りミツバチの活動しているのを見る。同じ頃野原を真白にノイバラが咲いているが、期待に反してこれはミツバチは訪れない。日本では報告は殆どないし、アメリカでも訪れないという報告である。(次号へつづく)